

Sound Garden 「我田音彩」 ／ Harp On Mouth Sextet

「雅楽」と「電子音楽」が千年の時を超えて、 京の都で出会い、交わり、ミラクルを起こす。

平安時代に生まれたとされる宮廷音楽＝雅楽を電子音楽と掛け合わせる、という無謀にも思える試み（お経とサンバを融合させた怪作にして傑作、「Gyo」も連想させる）。レイハラカミやEYEからも絶賛する京都在住の音楽家、ルビオラ率いるHarp On Mouth Sextetは、その突飛な発想をもの見事に昇華し、新たな音色を放つグループなのだ。

「倍音を使った日本の音楽として雅楽に行き着いて。でも笙などの楽器は高価で手の出せる代物じゃなかったんで、ジョン・ケージのアイデアにヒントを得てハーモニカをプリバード（西洋音階に配列されたハーモニカを雅楽音階に改造）するに至りました」（ルビオラ）

メンバーは改造ハーモニカ6人（すべて女性）とパーカッション、ルビオラによるエレクトロニクス、という8人編成。この最新アルバムではこれまで以上にフロア仕様の音になっているが、それは全国各地でライブを重ねてきた結果でもある。

「京都に住んでいることもあり、一時期庭園巡りにハマって、龍安寺の石庭とかに小宇宙（コスモ）!?を感じるのですが、そんな庭園の為のダンス・ミュージックを今回表現したつもり」（ルビオラ）

先日、メトロで行われたプレ・リリース・パーティでのライブを見るにつけ、「その感じ、あった!」と太鼓判を押したい。

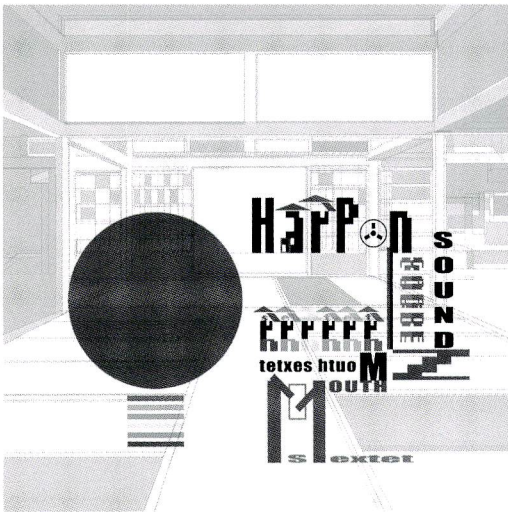
（中谷琢弥）



イベント・ライブ・演劇に映画、
CDリリースから書評に至るまで、
骨太entertainmentを丸飲み!

RELEASE

12.3
(Wed)



- 「Sound Garden/Harp On Mouth Sextet」
- 12.3 (Wed) 発売
- Imagined Records 2500円 ※2枚組

街場の

肩の力を抜いて、自由に語ろう……、
京の街と付き合うという……。

演算

保伊戸宵
(ほいとよい)

〔第14回〕

本誌が先月、300号を迎えたかと思うと、
エルマガジンが休刊する。

人と街とのつきあい方は、

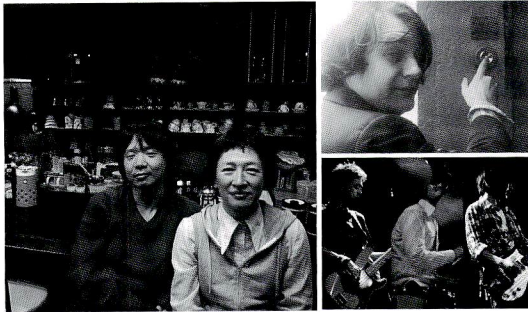
あまりにも変わってきているのかもしれない。
だからこそ街的な雑誌が京都には必要なのだ。

まるでオセロの駒のように「CF」が300号を迎えたのは逆に、京阪神の老舗情報誌エルマガジン誌（以下エルマガ）が休刊を発表した。ご存じの読者も多いと思うが、本誌よりもミーツ・リージョナル誌（以下ミーツ）は新しく、エルマガは古い。何も続けばいいというものではないが、雑誌というメディアというか街の面白いことや人にコミットしていく、そんな媒体が必要とされない時代が来たのかもしれない。だったらだつたで放つておいて欲しいのだが、出版が産業であり、商業誌というスタンスで雑誌を顧みるならば、少数のニーズに対応するだけのポトムがもはや雑誌にはないということなのだろうか？

10月14日の朝日新聞によると「同社の廣宣（ひろさげ）留理社長は「部数の問題以上に広告収入が厳しくなっており、今後は情報誌よりも生活情報重視の新女性誌に力を入れた方がいいと判断した」と話している。」そうだ。

確かにライフスタイルを誰かにサジェスチョンされることはとても楽である。しかも流行のトレンドを自らの思考で規定するなんてことは、現代社会においては全くじゃまな話なのかもしれない。

しかし、京都シネマに「地球のへそ」を観に行くことを忘れないようにする……や、家では飲めない酒や、かける……のできない大きくていい音で音楽を楽しませてくれる店に出か



みやこ音楽祭 '08

学生の手で生まれる音楽祭。 '08年冬の濃く輝く思い出に！

くるりと一人の学生(くるり「NIKKI」にもドラマーとして参加した川本真太郎のこと)のアイデアから始まった、という「みやこ音楽祭」。学生による運営、たとえば今年10年目の「大風流」もそうだけど、京都の学生さんって自発的で情熱的だなぁ、なんて羨みと嫉妬は、筆者(生まれも育ちも大阪市内)も学生当時に感じていたものだ。

5年目となる節目がそのまま転機となった今回。そう、会場が聖地・京大西部講堂から6月に

オープンしたばかりの京都FANJに移ったのだ。夜の部としてMOJO WESTでオールナイト・イベントも。「場所は変われど素敵な音楽はもちろん、いつものフードやドリンク、フリーマーケットなどお祭り要素は健在です」とは現代表からの言葉で、この変化には希望と期待を込めたい。年に一度の「京都音楽」の集まり場として、世代もカラーも演者も観客も超えて交わる2日間が、いよいよ始まるのだ。

(中谷琢弥)

■「みやこ音楽祭'08」 ■ 12.6 (Sat) ~ 7 (Sun) ■ OPEN 13:00~21:00
■ 前売り3800円 当日4300円 ※2日通し券7000円
■ 出演 12.6: 片山ブレイカース&ザ☆ロケンローパーティ/ふちがみとふなと /ジム・オルーク/rei harakami 12.7: ザ・ドクロス/キセル/mama! milk /騒音寺/Lucky Lips /くるり
■ 京都FANJ
京都市左京区上高野車地町101 ☎075-711-0711

■「みやこ音楽祭 夜の部」
■ 12.6 (Sat) ■ OPEN 22:00~翌5:00
■ 前売り2500円 当日3000円
■ MOJO WEST
京都市北区上賀茂桜井町104 エデン北山B 1
☎075-706-8869
■ <http://www.miyakomusic.com/>

EVENT
12.6 ~
(Sat)

京都カラスマ大学



まだ見ぬ京都に触れる「スマ大」で、 「We Kyoto！」と胸を張れるように。

「シブヤ大学」に倣い、京都の街全体をキャンパスに、魅力的な授業が次々と開講。例えば、10月には本誌でもお馴染み真筆/MAKOTOさんの「芸妓Haaaaan!」や、木版摺師・竹中健司氏の「公開木版体験~人力転機!」。11月は門川市長の「京都市長と出かけよう!」、作家・入江敦彦氏の「イケズの構造~真相と誤解とその実例~」といった具合。

開校式で面白い話を聞いた。欧米では、「Do

you Kyoto?」という言葉が成立するらしい。この際、「Kyoto」は動詞扱い。世界有数の世界遺産への関心の高さ、もったいない精神、おもてなしの心、自然との共存...世界が見る環境都市「Kyoto」。それらをすべて含んだ上で、「Kyoto精神に則って暮らしているか?」と、彼らは問う。果たして、京に住まう者として「Kyoto」スピリッツを実践できているか。

(山田涼子)

■「京都カラスマ大学」
■ 12.27 (Sat) ※以降、毎月第4土曜開講
■ 問い合わせ ☎075-641-8491 (特定非営利活動法人 京都文化維持・推進協会)
■ <http://k.karasuma.univnet.jp/>

EVENT
12.27
(Sat)

けたくなった時に役立つ雑誌があっても、僕はいいと思う。
80年代、エルマガはそんな街的なコミットメントというカタチで、最も有効な媒体であった。それが90年代にミーツという街とのアタッチメント誌とエンターテイメント&カルチャー誌に分かれ、2000年代には見事に「文系女子」やサブカルをも飲み込んだ、その時代の想像力を見事なまでにキャッチアップした媒体であったと思う。ある意味アタッチメントからデタッチメントへ、そしてそこからのアクションを後押しする、そんな媒体へエルマガは進化しているように感じていたのは僕だけじゃないだろう。
しかも、ついでにこのあいだ、ポカリスエットのロゴマークなど有名なヘルムート・シュミットがロゴをつくらせて新たな展開を始めたとはかき思っていたのに...。本当に残念である。これで、よけいに本誌の雑誌としての意味というか立ち位置が重要になつてくる、ともいえる訳なんだけれど、ねえ。
エルマガの休刊が「ネットメディアの驚異云々」や「女性誌のほが儲かるからやめたい」的なノイズ話ばかりで、雑誌という媒体そのものが正当に評価されぬまま消えていくのはあまりにも忍びないと僕は思う。
しかし、人と街とのつきあいは、あまりにも変わってきているのかもしれない。音楽にしても映画にしてもアートにしても、グルメにしても酒にしても...。ちよつとやそつとでびっくりするような話は街の片隅に落ちこぼれていない時代なのかもしれない。だからといって、引きこもっていても仕方ないこともまたバテているからややこしい。
だからこそ、知るべき人にきちんと物事が伝わると、もつともつと世の中はおもしろくなるという些細なことに一生懸命になる媒体があつてしかるべきなんだ。京都はそんな媒体雑誌が存在するのに都合のいいサイズの街であることも確かである。

保伊戸甫(はいと・よい) / コピーライター&エディター。関西の数々の雑誌編集を手掛ける。最近では大学案内や企業PR誌の編集が仕事の多くを占めるようになってきている。が、やはり好きなのは書店で値段が付いている雑誌のようである。